

婚約者を妹に奪われて政略結婚しましたが、
なぜか溺愛されているようです。

アンナ

男爵家の令嬢。グレンと親密な仲であるとほめかす。

クロード

グレンの古くからの友人。
船長をしている。

ベン

ルシナの元婚約者。
マリアンヌに心変わりをした。

マリアンヌ

ルシナの異母妹。
わがままで世間知らず。

グレン

若手の事業家。平民だが、その敏腕ぶりは貴族界でも評判になっている。ルシナになにやら特別な感情を抱いているようで……

ルシナ

アルベール伯爵家の長女。しっかり者だが、自分勝手な家族たちのせいでいつも苦労している。実家の借金を肩代わりしてもらう代わりに、グレンと結婚することに。

プロローグ

パイプオルガンが鳴り響く建物内に、ステンドグラスから光が差し込む。高いところにある天井には、天使が描かれていた。

私の隣にいるのは、高身長で引きしまった体つきの男性。その唇はきつく結ばれている。

漆黒の髪に、高い鼻筋とやや鋭い目つき。横からでも整っているとわかる顔立ちだ。

自分が当事者としてこの場にいるなんて、いまだにどこか現実味がない。

夢でも見ているんじゃないのかしら。

緊張でがちがちに体を硬くしながら考え込んでいると、目の前で神の像に祈りを捧げていた神父が振り返る。

「ではお二人は愛を誓いますか？」

神父の問いかけに、引きつった微笑みを浮かべるのが精いっぱいだった。

『いえ、私たちには誓う愛はございません。政略結婚ですから』

なんて言えやしない雰囲気。視線を感じ顔を向けると、その先には彼がいた。

そう、この人は私と結婚する。

彼は美麗な顔に、はにかむような笑みを浮かべた。

「――誓います」

低く、決意が込められたような力強い声が響く。

はつきりと返事をした彼は私に向かつて、優しく微笑む。

思わずドキッとし――すぐに唇をギュッと噛みしめた。

信じちゃダメよ、きつと彼だつてこれは政略結婚だと割り切っているはず。

「新婦は誓いますか？」

神父から再度質問され、ハッと我に返る。新婦つて私のことだわ、そうだった。

「……誓います」

どこか投げやりな響きになってしまったが、それでも感情を抑えて返答したつもり。

「では誓いの口づけを」

神父の言葉に軽くショックを受けた。覚悟はしていたけれど、あまりよく知らない相手と口づけをするなんて……

手が伸びてきて、ベールを持ち上げられ、視界が開けた。

微笑む彼はすぐくすぐく幸せそうに見えた。

あなた、演技がお上手ね。私に教えて欲しいぐらい。どうやったらこの場でそんなに幸せそうに振る舞えるの？

彼の右手が私の頬に添えられた。彼の手がわずかに震えているのに気づく。

もしかして緊張しているの？

まさかね……

潤んだ瞳が徐々に近づいてきたと思ったら、唇に柔らかな感触があった。ほんの軽く、一瞬だけの触れ合いだったが体温を感じ、顔が火照る。

ゆっくり彼が離れると、周囲から拍手が沸き起こった。彼も嬉しそうに目を細め、私を見ている。

ほら、これで満足かしら？ ついに貴族社会の仲間入りができたって。

盛大な拍手どころかこの結婚式でさえ、どこか他人事のように思えた。

第一章 これは政略結婚

私、ルシナ・アルベールは由緒正しい伯爵家の長女として生まれて、もうじき二十年。

ただし我が家は貴族といえども名ばかり。父に商才はなく、そのくせしょっちゅう新しい事業に手を出しては失敗し、そのたびに負債は膨らんでいった。お人好しで騙されやすい父は、詐欺師にとつて、格好のターゲットだったのだろう。そんなわけで、我が家の経済事情は非常に苦しかった。かといって父は考えを改めることはなかった。むしろ――

「今度の事業は絶対成功する!! 私はこれに賭けている!! 逆境にこそチャンスがあるのだ!!」

目を輝かせて力説するが、その台詞、毎回聞いている。無駄にポジティブで困ったものだ。

少しは学習しましょうよ、お父様。

――だが、何度説き伏せても、たしなめても、時には涙を見せても、父は止まることを知らなかった。

「いいじゃない、お姉様つてば、お父様のこと、もつと信頼したほうがいいわ」

「おお、マリアンヌ!! お前はよくわかつている!!」

なんとか思いとどまらせようと言葉を尽くしているのに、妹のマリアンヌが無責任な発言をするので、父はまた調子に乗る。

「お父様、新しい事業を始めるお祝いとして、ドレスを買って?」

「そうだな、新調して気分を変えていこう!!」

我が家の経済状況を知っているくせに、どこか他人事のマリアンヌに頭が痛くなる。

「我が家にそんな余裕はないのよ。それにあなた、先月もドレスを新調したばかりじゃない」

「嫌ね、お姉様つたら。流行についていけなくなったらおしまいよ? それに自分を磨いていれば、いつか見初められるかもしれないじゃない? 公爵様とか、うんとお金持ちの方に!!」

夢見がちなマリアンヌは目を輝かせて語る。

確かに妹は、姉の私から見ても、人目を惹く可愛らしい容姿をしている。ふわふわで触り心地のいい金の髪に、新緑色の大きな瞳。彼女が微笑むと、パツと周囲が華やぐ。私たち姉妹は母親が違うのであまり似ていない。実母は私が一歳を迎える前に流行り病で亡くなった。

お父様譲りの新緑色の瞳は同じだけど、私は茶色でストレートの髪だ。妹に比べたらどうしても地味に見える。

「本当にルシナは頭が固すぎるわ。いつもお金の話ばかり」

「そうだぞ、由緒正しきアルベール家の長女として、もつとドンと構えていなさい」

義母も父と一緒に私を非難する。こうなったら質が悪い。私の話には、ちつとも耳を傾けないからだ。

ドンと構えていたところで借金は減らないでしょうに。

楽天家の家族は財産を食いつぶすだけ。このままでは我が家は没落してしまう。

いえ、すでに没落寸前なのよ!!

「とにかく、お金がないの。屋敷に仕えてくれている使用人全員に解雇を言い渡すようなことはしたくないでしょう?」

軽く脅しをかけてみる。つい先月、賃金が払えそうになかったので、料理人を解雇したばかり。仕方がないので私が料理をするようになったが、家族からは文句の嵐だった。やれ肉が食べたいだの、品数が少ないだの。誰のせいで質素な食卓になっているのか、考えもしないのだ。

「それは困るわね……」

「でしょう?」

マリアンヌの顔が曇った。良かった、少しは響いたようだ。彼女の中にあるであろう、わずかな情にかけてみて正解だった。

「使用人がいなくなったら、私の世話は誰がするの?」

そっちの心配!?

まさかと思ったが、そう来たか。がつくりと肩を落とす。

「心配するな、マリアンヌ。そうなったら新しい使用人を雇えばいいだけだ」

父もまた、的外れなことを言う。ズレているのはカツラだけにして欲しい。

父の能天気な笑い声が、私の神経を逆なでする。

「そうね、最悪、私の世話はお姉様がしてもいいしね」

妹は私を使用人と勘違いしているのだろうか。

父が始めた新しい事業も芳しくなく、さらに負債が増えるかもしれない。

アルベール家の没落の足音が、そこまで近づいてきている。

遠くない未来、破滅を迎えるだろう。

そして私は今日もまた心配で胃がキリキリするのだった。

数日後、私は父の書斎に呼び出された。

「お呼びでしょうか? お父様」

ソックをして扉を開けると、ソファに座っていた妹が振り返った。

あら、マリアンヌも呼ばれていたのね。

父の隣には義母もいる。

「ルシナ!! よく来てくれたな。待っていたぞ」

上機嫌に手を広げ、大げさに喜ぶ父の姿に眉をひそめた。

「それでお父様、お話とはなんですか?」

「まずは座ってくれ」

父の向かい、マリアンヌの隣にそつと腰かけた。父はテーブルにすつと一通の封書を滑らせる。

「実は我が家に縁談が来た」

驚きで目を見開く。事業で失敗続き、借金まみれのアルベール家に? まともな神経の持ち主なら、そんな申し出をするわけがない。

つまり、この縁談には裏がある――

父は喜んでるようだが、そううまく話が転がっているわけがない。

「えっ？ それは私に？ お相手は公爵家？ それとも侯爵家？ どこで見初められたのかしら」
マリアンヌは一人で舞い上がっている。どこをどう間違ったら、そんな格上から縁談が来ると思えるのだろうか。客観視できなすぎて、この子の将来が不安だ。

「まあ、待ちなさい、マリアンヌ。今、説明をするから」

父はゴホンと咳払いをし、私とマリアンヌの顔を交互に見つめる。

「最近、貿易事業で新たな航路を開拓したり、次々と新しい店を立ち上げたりしている人物がいる。手広く事業をおこない、貴族社会にもその名が広まってきている」

「まあ、素敵!! この家門の方!？」

「それは……」

前のめりになる義母だったが、ここにきて父はサッと顔を逸らす。

そのまま無言になり、目をさまよわせた。さすがに様子がおかしい。

変なところで勘のいい義母は、気づいたようだ。

「……まさか相手は平民とか、言いませんわよね？」

それを聞いたマリアンヌは険しい形相に変わり、一気にまくし立てた。

「絶対に嫌よ!! 私がなぜ平民と!! アルベール家の誇りを捨てろというのですか!？」

「それはあんまりですわ!! 可愛い娘を平民に嫁がせるだなんて!!」

義母はマリアンヌをかばうようにガバツと抱きしめた。

ポロポロと涙を流し始めたマリアンヌを、私は冷めた目で見ていた。

誇りとか言って、笑わせてくれる。要は、私たちはそのプライドを捨てなければいけないところまできているのだ。

つまり、アルベール家の資金は底をついた――そういうことだ。

取り乱すマリアンヌと、それを抱きしめて慰める義母。大仰な様子にため息が出た。

「お二人とも、まだ話は終わっていないわ。お父様、続きをお願い」

「おっ、おお、そうだな」

マリアンヌが恨みがましい目を向けてくるが、気にしていられない。

父の話によると、相手は事業を手広くやっているらしいが、身分は高くない。

そんな相手が我が家に縁談を持つてくる理由は、ただ一つ。

そう、アルベール家の娘と縁を結ぶことで、貴族の仲間入りをしたい、お金の次は身分が欲しくなった、ということだろう。

「それでお相手はなにを望んでおられますの？」

「察しが良くて助かるよ、ルシナ」

ゴホンと咳払いをした父は顔を上げた。

「先方はルシナとの婚約を望んでいる」

薄々覚悟はしていたが、改めて父の口から聞かされると衝撃だった。

それになぜ私なの？ 社交界で人気があるのは華やかなマリアンヌのほうでしょうに。

「やっぱり、結婚するならお姉様が先よね!! 私じゃなくて良かった」

マリアンヌはコロツと態度を変える。

「ああ、安心したわ」

義母もあからさまに胸をなでおろしている。

「それでお相手はいくつの方？ まさかお父様より年上だったりして」

自分じゃないとわかった途端、冷やかすような物言いをするマリアンヌは本当に意地が悪い。

「でも、ちょうど良かったんじゃない？ お姉様は婚約が破談になったばかりですもの。傷物のお姉様と婚約したいなんて、相手に感謝しないかね」

さすがにこの言葉は聞き捨てならない。

だいたい婚約が破談になったのはあなたのせいでもあるでしょう？

「あなた——」

「マリアンヌ、少し黙っていなさい!!」

反論しかけた時、珍しく父が声を荒らげた。マリアンヌは頬を膨らませ、押し黙る。

「ルシナと話があるから、二人は少し外に出ていなさい」

父が追い払うと、二人は渋々ながらも退室した。ようやく静かに話ができる。

「それでこの縁談の条件はなんですか？ アルベール家の借金を肩代わり、でしょうか」

「察しが良くてありがたいよ、ルシナ。そうだ、この縁談を受ければ、アルベール家は金策に走る

なくて済むのだ」

やはりお金か。

「それにこの話を持ってきた時にも、縁談の支度金としてお金を包んでくださったのだよ」

「それはどこにありますの？」

「いや、ちょうど借金取りが来たから、利息分として払った。これで当分は借金取りに怯える必要もない」

なんてことを……!!

胸を張る父に、頭が痛くなった。

困窮こんきゆうしている家にお金を包んできたら手をつけるに決まっている。相手はそれを見越していたのだらう。

そう、縁談を断ることなどできないよう、根回ししたのだ。

なんとも頭の回る相手だ。どうあっても結婚し、貴族社会に進出したいようだ。

「お金のない我が家とぴったりのお相手ですわね」

皮肉を込めて言うと、父は困った顔を見せた。

「いや、ルシナが乗り気でないと言うのなら、断ってもいいのだが……」

ごによごによと父は言葉を濁す。本心ではそう思っていないくせに。

没落か政略結婚か。二つに一つ。

しばらく沈黙が続いたが、それを先に破ったのは私だった。

「……わかりました」

「承諾してくれるのか!？」

父の顔が目に見えてパツと明るくなる。この返答を期待していたのでしょうか？

「その代わり、条件があります!」

立ち上がり、ビシツと指を突きつけた。

「もう新規の事業に手を出さないでください!! 成功したことがないのですから!!」

ここまで借金を重ねたのも、父の考えなしの事業計画のせいだ。

「あともう一つ!!」

ここぞとばかりに声を張り上げた。

「マリアンヌをあまり甘やかさないでください」

「ああ、わかったよ」

そう父はうなずくが、いつも口だけだ。

「あの子に少し厳しめの家庭教師をつけてあげてください」

以前、家庭教師をつけていたが、マリアンヌは少し注意されるだけで不貞腐れてしまう。しまいには仮病を使って授業を欠席することが続いたので、家庭教師も匙を投げたのだ。

「それで相手のことなのだが……」

父がおずおずと口を開く。

お相手はやり手の事業家だそうだが、父も直接会ったことはなく、父の友人のサウル家が仲介し

て今回の話を持ってきたらしい。

「最初からお金を包んでくるなんて、よほど我が家の事情に詳しいみたいですわね」

「どんな方かはわからないが、やり手の事業家というならきつと素晴らしい方だろう」

父は会ってもいない相手を褒めるが、だったらお父様が彼に弟子入りして事業について詳しく教えてもらえばいい。

皮肉が喉まで出かかったが、呑み込んだ。

「三日後に顔合わせだ。お相手から迎えが来る。準備しておくように」

「わかりました」

なんだか実感がわかない。私は深くため息をつき、書斎から出た。

自室に戻ろうとしたところで、義母と妹が姿を現す。わざわざ父と話し終えるのを待っていたようだ。ご苦労なことだ。

「それでお姉様、どうだった? お相手はどんな人!？」

興味津々でマリアンヌが駆け寄ってくる。

「よくわからないけれど、三日後に会ってくるわ」

「じゃあ、どんな方かちつともわからないというの?」

「ええ、そういうことになるわね」

「まあ」

マリアンヌは口に手を当て、コロコロと笑う。

「ブクブクに太った、ギトギトに脂あぶらの乗った方かもしれないわね。お年を召しているかもしれないし、髪も薄いかも!!」

妹は完全に面白がっている。本当に、いい性格をしている。

「ルシナ、申し分ない縁談じゃない。くれぐれも粗相のないように!! 話をうまくまとめてくるのよ。相手の気が変わらないうちに」

義母が私の両肩をガシツとつかみ、圧をかけてくる。

「でも、まだお会いしたこともないのに……」

「いいからさっさと決めてくるのよ! お金持ちなのは間違いないのだから」

言いたいことだけ言うと、義母は踵かかとを返した。

義母はお金に目がくらみ、妹は面白がっている。私を心配してくれる人は誰もいない。

「うふふ。お姉様、うまくいくといいわね。ベンみたいなことにならないといいけど」

私の耳がピクリと動いたのを、マリアンヌは見逃さなかったようだ。

「あら、ごめんなさいね。私は彼のことなんて、どうでも良かったのだけど。彼がお姉様よりも私のことが好きだと言うのだから、仕方がないじゃない」

クスクスと笑うマリアンヌは、意地の悪い眼差しでこちらを見る。私の反応を探っているのだろう。

「そうね、その件はもう終わったことだわ」

肩をすくめ、につこりと微笑んでみせる。

大丈夫、私は傷ついてなどいない。そう自分に言い聞かせた。

「さあ、私もお会いする準備をしなくちゃね」

まだなにかに言いたげなマリアンヌにそう告げ、自室に戻った。

ボタンと自室の扉を閉め、そのままフラフラとソファに向かつて、ドサツと身を投げ出した。

「結婚……かあ」

実感がわかず、クッションを抱きかかえ、天井を見上げる。

ボーッとしていると扉がノックされた。いったい誰だろう。

「はい、どうぞ」

返事をする、扉から赤毛を一つにまとめてお団子にしたメイドが顔を出した。

「お嬢様、結婚なさるのですか!?」

開口一番に質問してくるメイド——シルビアは私専属のメイドだ。同い年だけど、しつかり者で、頼れる存在。

「あら、もう聞いたの? 耳が早いわね」

「先ほどマリアンヌお嬢様と奥様が話していらしたのを、小耳に挟んだのです。それよりも、本当なのですか?」

シルビアが真剣な顔で詰め寄ってくる。

「うーん、多分、そうなると思うわ」

「どうして他人事みたいな言い方なのですか!？」

シルビアに指摘され、苦笑する。

「だってついさっき言われたばかりだし、実感がわかないのよね」
「いまいちピンとこない——それが本音だった。」

「それでお嬢様、相手はどんな方なのですか？」

「それが——」

先ほどの父との会話を思い出す。

「なんでもいくつもの事業をしている方だとか……」

「お名前は？ 年齢はおいくつなのですか？」

質問され、ハッと気づく。

「あつ……聞くのを忘れた。どちらもわからないわ」

シルビアはがつくりと肩を落とす。

「しっかりしてください、お嬢様!! ちゃんと幸せにしてくださいさる方なのですか？」

「それもよくわからないのよね」

苦笑いで告げると、シルビアがため息をつく。しまった、心配させてしまった。

「で、でもお金持ちなのは確かみたいよ。この家の借金を払ってくださるのだから」
だから当面の間はシルビアのお給金の支払いは大丈夫だと告げる。

「私はお嬢様が心配です。慣れないお屋敷でうまくやっていけるのでしょうか」

「そうね、まあ、なんとかなる……と思うしかないわ」

シルビアは不安に顔を曇らせた。

「でね、もし良ければだけど……」

口にするのは勇気がある。私は手をモジモジとさせた。

「この縁談がまとまったら、シルビアもついてきてくれたら嬉しいかな、って」

「よろしいのですか!？」

シルビアの顔がパッと輝く。

「ええ、あなたさえ良ければ、一緒に来て欲しい。まあ、相手方にも了承を得なければならぬけれど……」

「行きます、行きます!!」

シルビアの返答を聞き、ホッとする。

「お嬢様のいないアルベル家は、泥船みたいなものですから」
はつきりと口にした彼女に笑ってしまう。

正直、借金がなくなっても、根本的な問題が残っている。家族がいる限り、いつまたなにをやらかし、使用人たちに暇を出すかわからないからだ。せめて長年仕えてくれたシルビアだけでも連れていきたい。そのほうが安心だし、なによりも心強い。

「縁談のお相手と三日後にお会いすることになったのよ」

クッションを胸に抱き、膝を抱えた。

「きつと素敵な方ですよ」

シルビアの言葉に苦笑する。そうだいいのだけれど。

「でもマリアンヌには脂ギツシユで頭髮が薄い方かもしれないわね、って言われたわ。お父様より年上かもしれないし」

「マリアンヌお嬢様は、本当に意地悪ですね」

私の代わりにプンプンと怒ってくれるシルビア。そんな彼女が大好きだ。

「あと、またベンみたいにならないといいわね、って」

彼の名を出すと、シルビアの眉がピクリと動く。

ベン・ボンド。

伯爵家の長男で父親同士が友人、そして私の二つ上の幼なじみでもある。背が高く細身で、知的な印象を与える男性だ。年齢が近かったことから『ベンとルシナを将来結婚させよう』と親同士が盛り上がり、婚約した。

彼となら愛を育み、穏やかな生活を送れる気がしていた。

だが半年前、街に出かけた時、私は偶然にも見てしまった。

ベンとマリアンヌが腕を組み、楽しそうに歩く姿を。

その時のベンは、ちよつとはにかんだ笑顔をマリアンヌに向けていた。決して嫌がっている素振りはなく、むしろ嬉しそうだった。

そんなベンの姿を見たのは初めてで、同時に悟った。

ベンはマリアンヌのことが好きなのだ、と。

マリアンヌからはベンが好きだとか、そんな話を聞いたことはなかったから、正直驚いた。

だが、私の知らないところで二人は愛を深めていたのだろう。

私は屋敷に戻ると、その足で父のもとへ向かった。

そしてベンとの婚約は解消して欲しい、とだけ告げた。

父は理由を知りたがったが、あとから本人たちが言うだろうと思い、固く口を閉ざした。ボンド家もそのまま婚約解消を受け入れたところを見ると、この婚約に対して思うところがあったのだろう。

ベンには、幼なじみとして幸せになつて欲しい。それに彼はマリアンヌのわがままに、ある程度慣れている。きつと二人はうまくいくだろう。

そう思っていたが、婚約解消後も一向にそんな話が出なかったので、痺れを切らしてマリアンヌに聞いてみた。

「どういふこと？ 私とベンが付き合っている？」

マリアンヌは意外にもキョトンとして首を傾げた。

街で仲良く腕を組んで歩く二人を見たことを告げた途端、マリアンヌは噴き出した。

「ちよつと、やめてよ。お姉様の婚約者だから、ちよつとからかってみただけよ」

なんていうことだ。気まぐれでベンを弄ぶようなことをしたの？

「でもやっぱり、ベンじゃ物足りないわ。つまんない。私はもつと格上を狙うから、ベンはお姉様に返すわ。地味な者同士お似合いじゃない」

手をヒラヒラと振ってバカにしたように言うマリアンヌに、さすがにカッとなる。

「人の気持ちをなんだと思っているの!？」

「はいはい。仕方ないじゃない。コロツと騙^{だま}されるほうも悪いのよ。それだけ私がお姉様よりも魅力的だったんだから、しょうがないわ」

ちっとも悪びれもせず、肩をすくめるマリアンヌ。私の怒りも彼女には通じなかった。

あれ以来、ベンには会っていないが、元気にしているだろうか。

「ではお嬢様、三日後のドレスを選びましょう」

シルビアから声をかけられて、ハッと我に返る。

「そうね、どれにしようかしら」

シルビアがクローゼットを開けるが、中はガランとしている。

「ここ最近、ドレスを新調していないから困ったわね」

義母とマリアンヌの浪費に頭を悩ませ、自分のことは後回しになっていた。

「大丈夫ですわ、お嬢様。お任せください!!」

シルビアがドンと胸を叩く。

「このドレスに花のコサージュをつけましょう。胸元がグッと華やかな印象になるはずです。真珠のイヤリングもつけて」

シルビアはいつも私のためにこうやっているのと考えてくれる。

「お嬢様はなにを着ても美しいので、大丈夫ですよ」

「あら、ありがとう」

シルビアのお世辞がありがたく受け取り、ウフフと笑う。

「いつも言っていますけどね、お嬢様のまっすぐでサラサラ、天使の輪が輝く髪と、新緑色の大きな瞳。もう、すべてが魅力的ですから。お嬢様に憧れているけれど、声をかける勇気がない男性が大勢いると噂で聞きましたわ」

「そんな、大げさよ」

思わず笑ってしまうが、シルビアの顔は真剣だった。

「もっと自信を持ってください!! マリアンヌお嬢様が意地悪なのは、お嬢様の美しさに嫉妬^{しど}しているのですわ」

「マリアンヌが？」

妹の見た目は可愛らしいので、それはないだろうに。

「はい、美人姉妹で有名ですが、特にお嬢様の神秘的な美しさが話題になることが多いみたいです。だからこそ、ライバル心を持っているのでしょうかね」

困ったものですわ、と言ってシルビアはため息をついた。

「ですので、今回の縁談も実はお嬢様のことを見初^{みそ}めたからかもしれないですよ？」

「そんなことあるのかしら」

名前も顔も知らない相手なのに、シルビアの話にドキッとしてしまう。

「案外、お金は口実で、本当はお嬢様に惚れてしまったのかもしれないですし」

そうだったらいいのにな、なんて思ってしまう。バカな期待だと笑われるかもしれないけど。お金と爵位が引き換えの政略結婚も、そこに愛情があれば、違ったものに見える。

どんな相手かわからないけれど、もし相手が私に愛情を持って接してくれるのなら、私も返せるように努力しよう。

シルビアの言葉に、ちよつと前向きになれたのだった。

あつという間に三日が過ぎた。

家で大人しく待っていた私のもとに、一台の立派な馬車が到着した。

「本当に大丈夫か？」

父が心配そうな声を出した。

「はい、行つてまいりますわ」

私一人で来て欲しいとのことなので、従うしかない。

「中にお入りください」

従者の案内のもと、馬車に乗り込む。

わあ、素敵ね。

思わず声が漏れそうになった。

立派な体軀の馬と黒塗りの馬車。内装も凝^こつており、座り心地も良い。

身分の高い貴族の馬車にも引けを取らない造りだ。我が家の馬車では長時間の移動はお尻が痛くなるので、正直助かった。

「では参りましょう」

お父様とシルビア、使用人たちに見送られ、出発した。

ちなみに義母と妹は朝早いのは苦手だから見送りはしないと、前日に宣言していた。

どうやらまだ寝ているらしいが、嫌味を言われながら送り出されるより、ずつといい。

早朝、まだ冷たい風を感じながら、深呼吸をした。

そして馬車に揺られること三時間。途中、休憩を取りながら、進んだ。

我がアルベール家は郊外にあるが、縁談の相手の屋敷はどうやら王都に近いところにあるらしい。途中、リート港を通り過ぎた。貿易が盛んなこの港には、大きな船が停泊している。

馬車の旅は思ったよりも快適に進んだ。

やがて広大な敷地の中、ポツンと立つ屋敷が徐々に見えてきた。

えつ、もしやあのお城みたいなお屋敷に住んでいる方なの？

窓から見える景色に首を傾げる。

城と見間違えるほど大きな屋敷に、広い土地。

いくら平民で爵位が欲しいといっても、ここまでの資産家、我が家では不釣り合いなんじゃない

かしら？

わざわざ借金まみれで没落寸前の私を選ばなくても、もっと条件のいい令嬢がいただろうに。

なぜ私なのだろう――

そこでハッと気づく。

よほど、重大ななにかが相手にあるのだ。すごく醜^{みにく}くて見るに堪^たえないとか、年齢がずっと上とか。

私は頬をピシヤリと叩く。

しっかりするのよ、相手の本質を見極めなければいけないわ。

たとえ容姿がちょっとアレでも、性格が優しければいいじゃない。年齢が上すぎても、敬愛を忘れないようにしよう。でも、将来は介護まで視野に入れないとダメかしら。むしろそのための結婚かもしれない。

混乱している間も馬車は進み、大きな門をくぐる。気がつく、屋敷のすぐそばまで来ていた。今更^{おぼ}けだけど、怖^{おそ}気^けづいてしまう。

でもしっかりとしないと。そうよ、いくらお金と爵位のための縁談だといっても、ひるんではいけない。お互い利害が一致し、幸せになるのなら、それでいいじゃない。

貴族の誇りだとかマリアンヌは言うけれど、没落して路頭に迷うより、その手を取ったほうがずっとマシだわ。

やがて馬車が速度を落とす。どうやら到着したようだ。

目を閉じてお腹にグッと力を入れると、しっかりと顔を上げた。

馬車の扉が開かれる。

「お待ちしておりました。ルシナ様。私は執事長のジールと申します。ジールとお呼びください。お会いできるのを楽しみにしておりました」

執事長は白髪まじりのグレーの髪を後ろでかつちりと固めている。背筋がしゅっと伸びたその姿は、上品な老紳士といった印象だ。

「ありがとう」

差し出された手を取って馬車から降りると、玄関の両扉がサッと開かれる。

目に入った光景に息を呑んだ。

広い大理石のエントランスフロアの中央には階段があり、その両脇には使用人たちがズラリと並び、頭を下げている。

使用人総出と思われる出迎えに、気後^{きご}れして足がすくみそうになった。

「さあ、旦那様がお待ちです」

豪華な屋敷の中に一步踏み入ると、フワッと花の香りが鼻孔^{びこう}をくすぐる。

白い大理石の床に敷かれたコバルトブルーのカーペットは、階段の先まで続く。

「お待ちしておりました、ルシナ様」

「足元にお気をつけください」

使用人たちに歓迎の意を示される中、足を進める。

これだけの大きな屋敷に、この使用人の数。いったい、どれだけの大金持ちだというのだろうか。そして肝心のお相手はどこにいるのだろうか。もう、ここまで来たら覚悟を決めるしかない。

見た目が多少好みでなくとも、内面を見ればいいだけのこと。年齢が上ならば、孫のような気持ちで接しよう。

すつと息を吸い、顔を上げる。

ふと階段の上にいた人物と視線が絡む。

その人物は柔らかに微笑んだ。

「ルシナ嬢」

低い声が私の名を呼ぶ。同時にコバルトブルーのカーペットの意味がわかった。

黒髪に深い青の瞳——きつと彼の瞳に合わせた色だ。

スラッと伸びた手足に高い身長。高い鼻筋に、力強さを感じさせる目、端正な顔立ち。

彼が、縁談を持ちかけた本人なの？

こんなに素敵な人が、どうして私に？

想像とかけ離れた人物に思わず見入ってしまい、立ち止まる。

相手はゆつくりと階段から下りてきて、私と対峙する。

近くに立つと、見上げるほど背が高い。

細身に見えて肩幅は広く、筋肉がガツシリとついている。

なによりも印象的なのは、深い青の瞳。まるで吸い込まれそうだ。

こんな綺麗な瞳を見るのは初めてのはずなのに、どこか懐かしくも感じる。

いや、待つて。私、どこかで見た記憶が……

「遠路はるばるよく来てくれた」

彼の低い声に、我に返る。

「はじめまして、ルシナ・アルベールです。本日はお招きありがとうございます」

「——はじめまして」

丁寧な挨拶をしたつもりだが、若干相手の声のトーンが下がった。

はじめまして、でいいのよね……？ 直接お会いしたことはないもの。

「旦那様、応接間にお茶を準備しますので、そちらにどうぞ」

案内された応接間は広く、豪華な調度品が品良く配置されている。

大理石のテーブルに革張りのソファ。シャンデリアの輝きを反射してより一層輝く美術品。広い

窓からは光が入り込み、ガラスの向こうには美しい庭園が見えた。

「素敵……」

思わずつぶやいた声を拾ったのか、彼は片眉を上げて微笑む。

「気に入ったのなら、良かった」

笑顔向けられてドキッとしてしまった。

腰かけるよう勧められ、ゆつくりとソファに腰を下ろす。

きつ、気まずい……

初対面の相手と二人きり。それになぜか、相手は私のことをじっと見つめている。聞きたいことはたくさんあるのに、頭の中がグルグルしている。

「あの……ルシナ・アルベールです。改めてよろしくお願いします」

「ああ、俺はグレン・フォルカード。グレンと呼んで欲しい」

「では私のことも名前でお呼びください」

「わかった」

一言返ってきたのみで、まったく会話が弾まない。この空気、どうすればいいの？

まあ、初対面だから慣れるまではしょうがないのかしら。

戸惑っている、ノックのあと扉が開かれた。

「お待たせしました」

ジールが紅茶のセットをのせたカートを押して入室してきた。

「ルシナ様、甘いものは好きでしょうか？ サクサクのパイもございますし、しっとりとした生地

の焼き菓子などもおすすめてです」

ジールは慣れた手つきで紅茶を淹れると、焼き菓子を勧めてくる。

「ありがとうございます、大好きです」

「それは良かったです」

手際よくお皿に並べられた焼き菓子に、勧められるままフォークを伸ばした。

クリームの甘さがちょうどいい。サクサクの生地と果実の酸っぱさと相まって、いくつでも食べられる気がする。

頬に手を当て、自然と笑顔になる。こんなに高級なお菓子を食べるのは久しぶりだ。

そこで強い視線を感じた。

グレンは頬杖をつき、じっと私を見ている。正直、視線の強さに萎縮してしまう。

「とても美味しいです。——グレン様は食べないのですか？」

「ああ、俺はいい」

あまり甘いのは好きではないのかな。こんなに美味しいのに。

その時、グレンがすっと席を立った。

どこに行くのかと思っただけで、すたすたと歩き、なんと私のすぐ隣に腰を下ろす。

私が驚いて動揺していると、グレンはケーキスタンドに手を伸ばした。

「ほら、もつと食べるといい。これも。そっちなも」

グレンは次から次へと、私のお皿に焼き菓子をのせる。

「あ、ありがとうございます」

嬉しいけれど、こんなに山盛りにされては困ってしまう。大食いと思われたのだろうか。

執事長のジールは、戸惑っている私に微笑みを向けたあと、カートを押して退室していった。

そしてまた二人きりになる。

えっと、さすがに会話をしないとダメよね。お互いのことを知るためにも！

食べてばかりはいられない。背筋をちゃんと伸ばし、彼を見つめる。

「――式の日取りを決めよう」

えっ、いきなりそれ!? 私たち、まだ出会ったばかりなのに!?

相手の台詞に度肝を抜かれ、驚いて目をパチパチと瞬かせる。

政略結婚ってこんなものかな。

お互いを知らなくても利害が一致するなら問題ないってこと?

「希望はあるか?」

「いえ、特には……」

実際、結婚するのはまだ先だと思っていたので、希望を聞かれてもすぐには出てこない。

あつ、でも一つだけ困ったことがある。

ドレスをどうしよう。我が家にドレスを購入する資金があるとは思えなかった。かといってドレスが準備できないと……

だが、私の落ち着きのなさを見て、相手は悟ったようだ。

「ああ。用意はすべてこちらです」

その発言を聞き、ホッと胸をなでおろす。厚かましい気もするが、なりふり構ってられない。でもすぐその発言が出てくるってことは、我が家の財政事情はお見通しってことよね!

「ウェディングドレスは五着ぐらい必要か?」

「えっ!」

これまたぶつ飛んだ発言をするグレンに驚きの声を上げる。

「足りないか。十着ではどうだ?」

花嫁何人いるのよ、と聞き返したくなる。

「いえ、一着で十分ですわ」

慌てて首を横に振ると、グレンは小さく息を吐き出す。

「君は身一つで嫁いでくるといい。なんの心配もいらない」

まっすぐに見つめられ、かけられた言葉にドキッとした。

「あの、一人だけメイドを連れてきても構わないでしょうか? 昔から仕えている者なのですが」

「構わない」

シルビアと一緒に安心だ。彼女も喜んでくれるといいな。

しかし、グレンの年齢はいくつなのだろう。私より少し上だと思ふ。

お父様ぐらいの年齢だったらどうしようと思ったけど、全然違うじゃない。

それに黒髪碧眼でとても素敵だ。

ちよつと無口だけど、まだ顔を合わせたばかりだし、これから知っていけばいいのかしら。

その時、再び扉がノックされ、若い使用人が顔を出した。

「失礼します、旦那様。スコール家から先日の投資の件で、早急に返答が欲しいと使いの者が来ています」

どうやら仕事が入ったらしい。

でも、ちょうど良かった。席を立つにはいい口実だ。

「では、お忙しいようなので、本日はこれで失礼しますわ」

につこり微笑んで立ち上がったところで扉が大きく開き、ジールが飛び込んできた。

「そんな!! せっかくだらしてくださったのに、ゆつくりなさってください!!」

ジールは隣に立つ若い使用人に、鋭い視線を向ける。

「客人が来ている時に、そのようなことを告げるべきではない!!」

「も、申し訳ありません!」

ジールは若き使用人にいだちを見せたあと、深くため息をついた。

「誠に申し訳ございません、私の教育不足です」

「いえ、気になさらないでください」

ジールはすっかり恐縮している。逆にこっちがいたたまれない。

「旦那様、この日のために整備した庭園と一緒に回られてはいかがですか?」

ジールが引き止めてくれるが、今回はさつさと退散したほうがいい。

「いえ、今日はまだ顔合わせなので。また日を改めますわ」

そつとソファから離れ、エントランスフロアに向かった。

「私の気が回らないばかりに、ルシナ様にこんな失礼を……。執事長失格です」

「いいえ。忙しいのに時間を作ってくださいだったグレン様に感謝いたしますわ」

私とジールが話す横で、先ほどからグレンがなにか言いたげにしているが、気のせいだろうか。

「では、失礼します」

来た時と同じ、使用人総出で見送られ、屋敷をあとにした。

馬車に乗った瞬間、一気に疲れが出て、座席に深く腰かけた。

うまくいくのかしら、この結婚。

正直、想像以上に見目麗しい相手だったのでびっくりした。だが、あまり交流ができないまま、顔合わせは終了した。滞在時間は十五分つてとこかしら。

帰り際、ジールが教えてくれたのだけれど、グレンは二十二歳。やはり私より年上だった。

私が屋敷に来るこの日を、心待ちにしていたと言っていたけど、怪しいものだ。

この結婚には裏があると疑わずにいけない。

うまい話など、そう簡単に転がってはいないのだ。

屋敷に戻ると、今度は家族総出で出迎えられた。

「おオルシナ!! 無事に帰ってきたか!!」

「どうだった!? お姉様!? 相手は醜男だった?」

先頭にいた父を押しのけるようにして、マリアンヌがグイッと前に出てきた。それに続いて義母も身乗り出す。

「無事に相手に会えたの? そのわりには帰ってくるのが早かったじゃない」

帰ってくるなり質問攻めだ。

「ただいま帰りました。無事にお相手のグレン様には会えましたわ」

私は淡々と述べた。

「グレン様は二十二歳で素敵な方でした。口数は少なかったですが、まだ顔を合わせたばかりなので仕方ないかもしれません。お忙しいようでしたので、すぐ帰ってきましたわ」

「えっ、そんなに若い方だったの？ てっきりお父様ぐらいかと思っていた！」

マリアンヌ、残念そうな声を出して、なにを期待していたの。それを私に隠そうともしないところがあるらしいわ。

「でもいくら素敵でも平民ではねえ……。私なら絶対に無理よ」

「そうよ、マリアンヌの縁談だったら、断固として許さなかったわ」

はいはい、この人たちの相手をするのは疲れたわ。勝手にしてちょうだい。

「もういいですか？ 疲れたので自室に戻りますね」

まだ嫌味を言いたそうな二人を残し、部屋に戻った。

「お帰りなさいませ、お嬢様」

ちょうどベッドメイキングをしていたシルビアの顔を見て、緊張の糸が切れた。

「ただいま、シルビア」

そのままソファに身を投げ出した。

「大丈夫ですか？ お嬢様？ そんなにショックなお相手でしたか？」

あわあわと慌て出すシルビアに首を横に振る。

「黒髪に深い青の瞳。手足も長くて背も高い。人目を惹く容姿の二十二歳」

「おおっ、良かったじゃないですか!!」

シルビアはパチパチと手を叩く。

「手入れされた庭園に、我が家の三倍ぐらい広いお屋敷。家具も調度品もすべてが一流品」

「素晴らしい!! お金持ち、最高です!!」

シルビアは興奮して拳を突き上げた。

「でも、あまり会話が続きなかったわ」

「て、照れていらっしやるのではないのでしょうか？」

シルビアは一瞬言葉に詰まったあと、フォローしようとする。

「もしかしたら、私に興味がないのかもしれない。——私、知らず知らずのうちに、心のどこかで期待していたみたいね」

私のことが好きで、ぜひ結婚したいと言ってくれるんじゃないかって——そんな夢物語あるわけがなかった。やはり現実には厳しい。

「でも、結婚したらシルビアを連れてきていいと言ってもらったの!! アルベール家にいるよりはずっといいはずよ」

そうだ、没落して住む屋敷がなくなる前に手を打たないと。

「はい、お嬢様。私はどこへでもついていきますよ!!」
「ええ、よろしくね」

シルビアの言葉は素直に嬉しかった。

「お、お嬢様、お荷物が届いております」

翌日、部屋で本を読んでいると、シルビアが慌てた様子でやってきた。
変なシルビア。荷物というけれど、なにも手にしていないじゃない。

思わず笑ってしまう。

「まあ、あなた。荷物をどこへ置いてきたの？」

ちよつとそそっかしいところのある彼女のことだから、どこかへ忘れてきたのだろうか。

「違うのです、お嬢様。ついてきてください」

慌てているシルビアのあとについて、案内された部屋に入る。

そこに広がる光景に息を呑んだ。

「すごいですよ、これすべてお嬢様への贈り物だそうです」

一つ一つ美しく包装された贈り物が山になっていた。大小ある包みの中にはなにが入っているのだろう。

「差出人はどなた？」

「グレン・フォルカー様です」

いきなり送り付けられた大量の贈り物。正直、嬉しいというより困惑して立ち尽くした。

「お嬢様、開けてみますか？」

「そうね、願いますわ」

ウキウキしているシルビアは早速開封に取りかかる。

「まあ、こちらは素敵なおドレスですわ。それも何着も！」

美しいトレーンが印象的だったり、色合いが上品だったり、さまざまなデザインが揃っている。

「こちらは帽子です。なんて優雅なデザインなのでしょうか」

シルビアははしゃぎながら開封を続ける。

「素晴らしい輝きのネックレスと髪飾りですわ」

シルビアが見せた装飾品はまぶしいくらい輝いていた。

これは宝石というものでは……

そのあとも装飾品が多数出てきて、目まいがした。

「高価なものばかり……」

昨日の今日で贈り物攻撃……顔合わせで着用していたドレスが古いと気づかれたのだろうか。

「もしかして、私、あまりにも貧乏くさい格好をしていたから、憐れあはれまれたのかしら？」

「そんなわけではないですよ!!」

シルビアがクワツと口を大きく開け、反論する。

「これだけの贈り物、一日で用意できるとは思いません。きっとお嬢様のために、前から準備して

いたのではないのでしょうか？」

確かにシルビアの言うとおりで一日で準備できるものではない。だけど前から準備していたようにも思えない。

「それにドレスはお嬢様のサイズにピッタリだと思います。ということは、前々からお嬢様を知っていて、計画していたのではないですか？」

でも私は彼と、初対面だったと思うの。

その時脳裏に、深い青い瞳をこちらにじつと向けているグレンの姿が浮かんだ。
なにか言いたいことをこらえているような、そんな眼差し。

「えっ、なにこれ!!」

マリアンヌの大きな声で我に返った。

「すごい、ドレスに靴、それに宝石まで……」

マリアンヌはキョロキョロと部屋を見回し、イヤリングの一つを手にとった。

「これすごく素敵ね。私に似合いそう!」

イヤリングを耳元にかけていき、鏡に映して確認している。

「お姉様、いったいこれどうしたの？ お父様にねだって買ってもらったの？」

そんなことはしません。あなたと一緒にしないでちょうだい。

「すべて婚約者からの贈り物よ」

「えっ!? これを全部？」

マリアンヌはあんぐりと口を開けた。やがてプクツと頬を脹らませる。

「ずるいわ、お姉様ばかり!! それに相手がこんなお金持ちだなんて聞いてないし!!」

確かに想像以上の贈り物だった。加えて広大な土地に立つ、あの立派な屋敷を思い出す。

私たちが思うよりずっと資産家なのかもしれない。

「ねえ、お姉様。半分私にちょうだい。いいでしょう」

マリアンヌがすり寄ってくるが、首を縦には振れなかった。

「人からの贈り物を簡単に譲ってはいけないわ。まだお礼を言ってもいないのよ」

たしなめるとマリアンヌの顔が憤怒に染まる。

「こんなたくさんあつたら、少しぐらいわけたって、気づくわけじゃないじゃない!」

「でも、贈ったものを勝手に譲られては、気分は良くないでしょう」

私もここは断固として譲らない。

「そんなこと言って、独り占めしたいだけなんでしょ!! 本当、ケチで意地悪ね!!」

マリアンヌは手にしていたイヤリングを、投げつけるようにして元の位置に戻した。

「あーあ、本当に気分が悪い。お金を持っているからといって使い方が下品ね。普通、家族にも気を遣うものでしょうに。そこまで頭が回らないなんて残念な人なのね!!」

捨て台詞を吐き、プリプリと怒りながら退室したマリアンヌにホッとする。

「お礼状を書かないとね。シルビア、ここを片付けたら用意してもらえる？」

「はい、承知いたしました。ここは私が片付けますので、お嬢様は部屋にお戻りください」

「ありがとう」

さてお礼状にはなんて書こうかしら？

自室に戻り、便箋を前に頭を悩ませる。

彼はなぜ前触れもなく大量の贈り物を届けてきたのだろう。

私の姿がそんなに恥ずかしかったのかしら？

どうやってお礼を伝えようかと考えたけれど、月並みな言葉しか出てこない。

贈り物に驚いたこと、だけどとても嬉しかったことを書き記した。最後に必ず、今後はお気遣い不要だと伝えなければいけない。

まあ、次があるのと期待しているわけじゃないけど、贈り物の額が額だし。なにより、質素に暮らしていた身としては、どうしても相手の懐事情が気になってしまう。無理しているんじゃないのかしら？ つて。

だからこそ、今回で贈り物はもう十分です、ありがとうございましたと、お礼状に記した。

そして二日後、シルビアがまたすっ飛んできた。

「お嬢様〜!! 贈り物です!」

「えっ、また!？」

だが前回と違ったのは、贈り物が一つだけだったこと。

シルビアが手にしているその箱を、開けるように指示する。

「うわぁ、とっても素敵ですわ」

出てきたのは、生地肌の触りからも高級品だとわかる青いドレス。肩口のコサージュが目惹く、美しいデザインだ。

でも先日もなくさんいただいたばかりだったというのに。

箱の中に入っていた手紙に目を通す。

「どうしよう、シルビア」

「どうなさいました？」

「来週、友人が舞踏会を開催するから、一緒に出席して欲しいって。そのためのドレスだって」

「では、来週は磨き上げましょうね!!」

シルビアは腕まくりをした。

……ということは来週、彼に会えるのね。

会ったら贈り物のお礼を直接言おう。

来週、会えると思ったら心臓がドキドキしてきた。どうしてだろう？

「お嬢様、少し顔が赤いですけど？」

「き、気のせいよ!!」

シルビアに指摘され、慌ててごまかす。

「ちょっと、お姉様!! また贈り物が届いたって……!!」

扉が勢いよく開くと同時にマリアンヌが顔を出した。

「マリアンヌ、いくらなんでもノックぐらいしなさい」

軽くたしなめるが、聞いていない。それどころかシルビアが手にしていたドレスに目を釘付けにし、プルプルと震えながら指さした。

「そつ、それ……!! 今話題のマダム・シャーリーがデザインしたドレスじゃない!! いったい、どういうこと!? 半年先まで予約が埋まっているのというのに!!」

えっ、そうだったの？

「ずるい、ずるいわ、お姉様ばかり!!」

案の定、マリアンヌは子供みたいに地団駄を踏み始めた。こうなったら手がつけられない。深く息を吐き出した。

「いただいたのよ。来週の舞踏会に一緒に出席して欲しいからって」

マリアンヌに言うのと面倒なことになるから嫌だったが、黙っているわけにもいかない。遅かれ早かればれるのなら、自分の口から告げたほうがましだ。

「じゃあ、その舞踏会に私も出席するわ!!」

「えっ？」

マリアンヌは突拍子もないことを言うのと、私に寄ってきて、グッと腕を絡ませた。

「たった二人の姉妹ですもの。それにお姉様の縁談相手に興味があるわ。いいでしょう？ 結婚したら私の義兄になる方だし」

つい昨日まで平民だとバカにしていたのに、この変わりよう……

あきれてマリアンヌの顔を見つめていると、逃がさないと言わんばかりに、腕にギュッと力が込められた。ここまでくるとマリアンヌは引かないことは、これまでの経験で嫌というほど知っている。

「私の一存では決められないわ」

「じゃあ、お手紙で聞いてみてよ。妹も連れていきたいって」

マリアンヌはグイグイ詰め寄ってくる。

「……じゃあ、聞いてみるけれど、断られたら納得してね」

たとえ断られても、大人しく引き下がる姿は想像できないが、念を押す。

「わかったわ」

途端に上機嫌になったらマリアンヌがパッと腕を離れた。

「私も準備をしなくちゃね。どんなドレスにしようかしら」

もう行く気になっている。

「先日、お姉様に贈られたドレスの中から選んでもいいわね」

「それはダメよ。送り主の了承もなしに貸せないわ」

「本当にケチね。借りるだけじゃない」

マリアンヌは不満げに頬を脹らませた。

そもそもあなたに貸して、返ってきていないものがたくさんあるんですけど。借りる^{イコル}＝もらっ

たと考えているから厄介なのだ。

「まあ、いいわ。先週、新しいドレスが出来上がってきたし。それにするわ」
また新調したのかと目を丸くした。

「あとお姉様のお相手の友人で素敵な方がいたら、私を紹介してよね」
顔をグイッと近づけ、マリアンヌは強く言う。

「あくまでも貴族よ、貴族。平民は論外だからね！」

マリアンヌは言いたいことだけ言うと、サッと去っていった。
なんだか疲れた。まるで嵐が去ったあのようなのだ。シルビアも同じ気持ちだったらしく、表情が
強張^{こわば}っている。

「ドレスはクローゼットにしまっておいて。あと手紙を書くわ」
断って欲しいと願いながら、お礼とともにマリアンヌの要望を書いた。

あつという間に舞踏会当日になった。時間より早めに馬車に乗り込む。

「うふ、楽しみね」

向かいの席にはいつも以上に着飾ったマリアンヌが座る。

あの日、先方に出した手紙の返事はすぐに届いた。

舞踏会への妹の出席も快く了承してくれ、なおかつ――

「すごいわ、私にもマダム・シャリーーのドレスを贈ってくださるなんて、優しい方ね」

マリアンヌが上機嫌な理由は、彼女にもドレスが届けられたからだ。

私とデザインは違うが、薄い黄色で華やかなバックリボンが印象的だ。マリアンヌのイメージに
ぴったりで、よく似合っている。

もしや、妹と会ったことがあるのかしら？

だから、こんなにイメージどおりのドレスを贈ることができたのか？

だが正直、ここまでしなくてもいいのに、と思ってしまった。

「あつ、ほら、見えてきたわ。会場のサウル伯爵家よ」

庭園に明かりが灯り、遠くからでも華やいでいるのがわかる。

はしゃぐマリアンヌを前にして、気の重い私は曖昧^{あいまい}に返事をした。

エントランス前で馬車を降りる。

周囲も着飾った人たちがばかりだ。皆、今日の招待客なのだろう。

正面扉の近くで腕を組む人物が視界に入る。

あれは……

後ろになでつけた黒髪に、横からでもわかる端正な顔立ち。

グレンだ。

見目麗^{みめうつく}しい彼は周囲の視線を集めていたが、特に気にする様子もない。
心臓がドクンと音を立てた。

「どうしたの？ お姉様」

足を止めた私に、マリアンヌが声をかけた。

それと同時にグレンがこちらに視線を向けた。

私を視界に入れると一瞬で表情が明るくなる。そして優しく微笑んだ。

隣を歩いていたマリアンヌが息を呑むのがわかった。

「よく来てくれた」

私をまっすぐに見つめながら近づいてくる彼から、視線を逸らせなかった。

「お、お姉様……?」

マリアンヌが我に返り、私のドレスを引っ張った。私も慌てて挨拶をする。

「本日はお誘いありがとうございます。また、このような素敵なドレスもいただき、感謝しております」

深々と頭を下げたあと、マリアンヌへ視線を投げる。

「妹のマリアンヌでございます」

「ああ、グレン・フォルカーだ」

「えっ、えっと、ドレス、ありがとうございます」

マリアンヌは顔を真っ赤にし、しどろもどろだ。

グレンは私たち姉妹を交互に見ると、フツと微笑んだ。

「よく似合っている。会場では美人姉妹だと注目を浴びるだろう」

笑顔向けられ、ドキドキしてしまった。

「待っていたんだ、中へ行こう。皆に紹介したい」

差し出された手を取ると、ギュッと力が込められた。鼓動がうるさい。私の心臓、どこかおかしくなってしまったみたい。

顔の火照りを気にしながら、屋敷に入った。

舞踏会は立食形式で、会場はにぎわいを見せていた。

談笑している者や、踊っている者、皆がめいめいに楽しんでいる。

むせかえるような香水と化粧品匂い、そして熱気。あまりこういった場に顔を出さない私は人に酔いそうだ。

グレンが急に足を止めて腰を折り、視線を合わせてきた。

「具合が悪いのか? 先ほどから顔が赤い」

「いつ、いえ、大丈夫です」

見透かされた気持ちになり、慌てる。

「そうですね、お姉様ってば、人に酔ったみたいですね。私が少しだけ連れ出しますわ。すぐに戻ってきますから、ちょっとお待ちになってください」

マリアンヌは有無を言わず、私をバルコニーへ移動させた。

夜風が頬をなで、火照った体を冷やしてくれる。私はホッと一息ついた。

二人きりになった途端、マリアンヌが豹変した。